

アフリカ言語による歴史叙述とアフリカ人知識人の形成： ズルー人キリスト教徒マゲマ・フゼの生涯と 著作をめぐって

上 林 朋 広

要旨：本稿は、一冊の研究書『マゲマ・フゼ：コルワ知識人の形成』を題材に、20世紀初頭の南アフリカでアフリカ言語で歴史を書くことが持った意義を考察する。著者であるショニパ・モコエナはズルー語で歴史書『黒い人々：彼らはどこから来たのか』を書いたマゲマ・フゼの生涯を、フゼはいかに単なる情報提供者ではなく知識人となったのかという問いを中心に描き出す。『フゼ』は、はじまりについての本であると同時に、この本自体が一つのはじまりである。すなわちズルー人がズルー語で執筆した初の歴史書を対象とすると同時に、『フゼ』の出版が契機となりズルー語を含めたアフリカ言語で書かれた史料を分析する研究が促進されたのである。本稿は『フゼ』の検討を通して、アフリカ諸言語で書かれた著作が現存すること、それ自体の意味に着目することでフゼを含めたアフリカ知識人が生きた人種隔離期南アフリカへの新たな視点が得られると論じる。

1. はじめに：はじまりの本としての 『マゲマ・フゼ』

本稿の目的は、一冊の研究書『マゲマ・フゼ：コルワ知識人の形成 (Magema Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual)』を題材に、20世紀初頭の南アフリカでアフリカ言語で歴史を書くことが持った意義を考察することである。著者のショニパ・モコエナ (Hlonipha Mokoena) は19世紀後半から20世紀初めまで生きたズルー知識人フゼの生涯とその著作を検討することで、それまでの南アフリカ史研究でほとんど省みられることのなかったアフリカ言語による歴史叙述が実は豊かな鉱脈であることを明らかにした。本稿はモコエナの著作の内容を紹介し、若干のコメントを付すことで、まずズルー語の歴史書の出版とその著者の生涯が、文字と印刷技術の導入を伴う植民地化という大きな社会変容を反映していたのかを確認する。その上で、いかにしてコルワと呼ばれるキリスト教改宗者のアフリカ知識人が出版によって社会に変化をもたらそうとしていたのかを説明していきたい。

「本 (books) について書くのは、あるいは1冊の特定の本 (a singular book) について書くのは、例外を作ることだ」(1)¹⁾。ショニパ・モコエナはこのように彼女の本をはじめ。この本は、はじまりについて

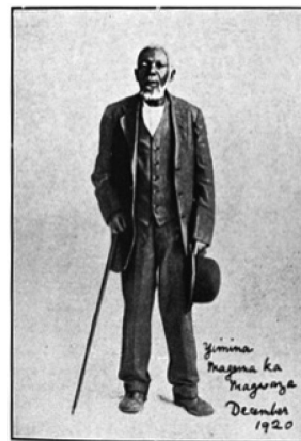


図1 マゲマ・フゼの肖像 *Abantu Abamnyama* より

の本であると同時に、この本自体が一つのはじまりである。この本が扱うはじまりとは、1922年に出版された一冊の本、『黒い人々：彼らはどこから来たのか (Abantu Abamnyama: Lapa Bavela Ngakhona)』である。『黒い人々』は、ズルー人の著者によって、はじめてズルー語で書かれた歴史書である²⁾。マゲマ・フゼ (図1) の生涯と彼の著作 (ズルー語新聞に掲載された記事と『黒い人々』) を仔細に分析することで、モコエナはズルー語の読み手と書き手が作り出す活発な議論の場に注目することの重要性を示した。そして、モコエナの著作は、ズルー語で書かれた史料を用いた研究が興隆する一つのきっかけとも

なっている。

モコエナの研究書に入る前に、彼女が対象としたフゼの著作『黒い人々』と筆者との出会いについても述べておこう。東京外国語大学の図書館で、その本を見つけたのは、全くの偶然だった。2002年にアジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)が北区・西ヶ原の旧キャンパスから現在の府中キャンパスに移った際に、大学図書館の中に蔵書が収蔵されたセクションが造られた。地域ごとにまとめられた本棚の南部アフリカの箇所で見当てる本を探していると、「Abantu Abamnyama」と書いてある金文字の背表紙が目についた。自分が研究しているズルー人の歴史、その歴史を扱った著作のうちズルー人がズルー語で書いたはじめての本である。ケープタウン大学がデジタル化していたので、パソコンの画面上では見ていたが、実際に手に取るのははじめてであった。この本については、もちろんCiNiiやWorldCatでも調べたが、日本の図書館での所蔵は見つからなかった。それが意外なことにこんな近くにあるとは³⁾。すぐに手に取って表紙を開くと、昭和42年2月7日と印が押されており、AA研開設の3年後に購入されていたことが分かる。誰が、どのような経緯で、いまから思えば非常に貴重なこの本を購入し、所蔵することになったのかと考えつつ、カウンターに持っていき貸出の手続きをする。画面上に映し出されたのは、しかし、本のタイトルではなく「未登録資料」という文字であった。司書の方に訊くと、AA研の旧蔵書の中には、多彩な言語を特定することができずに未登録となっている本が一定数存在すると説明を受けた。

昨年、2022年は、『黒い人々』が出版されてちょうど100年であり、ズルー人のもともとの居住地域であるクワズルー・ナタール州では、100周年を祝う州政府主催のイベントが開催された。州知事であるシーシェ・ジカララ(Sihle Zikalala)も講演を行い、モコエナの伝記など近年の研究に依拠しつつ、フゼの貢献を列挙し、植民地主義の最中にズルーの王家や民衆の記録を残したフゼをクワズルー・ナタールに住む人々は顕彰すべきであるとまとめる⁴⁾。

南アフリカでは出版100周年が祝われる一方、日本では所蔵先の図書館でも未だに書誌情報が登録されていない。この落差は、あるいは当然のことだと感じられるかもしれない。フゼが用いたズルー語は南アフリカで最も多くの母語話者を持つ言語である。しかし、日本では解説書も出ていないマイナーな言語である⁵⁾。フゼが母語であるズルー語で書いたことがアフリカ

研究者も含めてその著作が等閑視されている要因であるとまずは指摘することができるだろう。

日本のアフリカ史研究において、文字史料の重視は特に期待されていないかもしれない。ズルー語のようなアフリカ言語で書かれた歴史書の分析に基づいた研究は、日本の歴史学の現状からすればあまりにも遠い。それはフゼの『黒い人々』の書誌情報が未登録であることに、端的に示されている。しかし、同時に書物から歴史観を分析するという研究のあり方は、あまりにもありきたりであると思われるかもしれない。アフリカにおける歴史観について論じるのであれば、史(ふみ)を用いて過去を明らかにするという見方とは違った方法を提示し、オルタナティブな歴史像を描くことこそがその成果として求められているのであり、出版された書物の歴史叙述を考察するという研究手法には新規性が感じられないのだ⁶⁾。しかし、アフリカ大陸において本が、しかもアフリカ言語で書かれた本が、いかに出現したのかを分析することには、本を生み出す社会的な条件と、本がもたらす社会変容を根本から見直すことにつながるのではないだろうか。すなわちアフリカ史における書物という視点は、日本やヨーロッパ、アメリカではその存在を疑われることのない本を異化する可能性を秘めているのである⁷⁾。

南アフリカを中心とするサブサハラアフリカの書物史研究を主導してきたイザベル・ホフメイヤーが、英訳されたフゼの『黒い人々』をひきながら述べるように、アフリカにおける書物史の重要な視点は、アフリカにおいてそれまでに作られてきた伝統的な知識のあり方にいかにして書物が差し込まれたのか、また書物の登場がいかに既存の知のあり方を変容させたのかを問うことである⁸⁾。モコエナがフゼの生涯と著作の分析を通して示したのは、まさに出版という形態による新しい知の出現である。

ズルー語というマイナーな言語で書かれた歴史書を分析する本書『フゼ』を日本語で紹介する意義はこのようにまとめることができるだろう。しかし、南アフリカにおいてもフゼの著作は、2000年代に入るまで専門家以外からは省みられることはなかった。1994年に全人種参加の選挙が実施され体制が変わるまで、南アフリカは、少数の白人とされた人々によって支配されてきた。公用語は、英語及びオランダ語を基礎とするアフリカンス語の二つのヨーロッパ言語のみであり、ズルー語を含めたアフリカ言語は民族間の差異を強調するために学校教育で重視されるということがあったが、行政・ビジネス・学術の言語として用いら

れることはなかった。アフリカ言語は、民族の文化を保存するという目的においてのみ必要とされたのである。

フゼの著作も、フゼの見解や歴史の描き方それ自体は重要とされずに、研究者のすでに定まった視点（例えば、特定の「部族」の歴史やズールー人の伝統行事についての人類学的研究など）に基づいて読んだときに、必要な情報が得られるかどうかだけが問題であった。フゼの『黒い人々』は、クワズールー・ナタールの貴重な歴史的資料を刊行することを目的とするキリー・キャンベル図書館叢書の一冊として、1979年に英訳・出版された⁹⁾。フゼの著作が、歴史書としてではなく、ズールー人に関する人類学的な資料として捉えられていたことは、その序文でも分かる。フゼの『黒い人々』は1979年に、Black people and whence they come として英訳・出版された。訳者はズールー語に堪能な白人原住民政官のハリー・ラグ、英訳に際してフゼの著作を編集し直した上で序文を書いたのは言語学者のA.T. コープであった。コープは、フゼの著作を歴史書として評価しているわけではない。序文で、コープは、話し言葉のように書かれたフゼのズールー語の文体は未熟で、内容は間違いが含まれている上に様々な要素が混在していると述べる。そのため、コープは編者の権限でフゼの著作を三つのセクション (Historical, Ethnological, Zulu History) にまとめ直している¹⁰⁾。モコエナは、コープによる再構成は、植民地統治との関わりの中で発展してきた知識の枠組みにフゼの著作を定位する試みであったと指摘する (44)。

その上でコープは、フゼが描く歴史の価値に留保を付す。コープは、フゼの著作は個人的な観点からズールー民族やその諸「部族」をまとめたものであり、扱う範囲には限界があると述べる。フゼの著作と対比する形でコープが持ち出すのは、カトリック宣教師A.T. ブライヤントの700ページを超える大著『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時 (Olden Times in Zululand and Natal)』である¹¹⁾。ナタール植民地は1840年代の形成当初から、アフリカ人首長を統治機構に組み込む間接統制的な統治方法を用いてきた。植民地政府によって任命された人物を含めて「伝統的」な権力者と彼らが権限を持つ「部族」という単位で歴史を辿るという植民地権力を補強する試みは、それゆえ同時期まで遡ることができる。実際に、初代原住民長官セオフィラス・シェップストンの報告書では、各「部族」の領域が地図に示された上で、それぞれの歴史が簡略

に提示されている¹²⁾。

1929年に出版されたブライヤントの『過ぎ去りし時』は、「部族的」な歴史叙述の集大成であった。コープにとって、確認できる限りのズールー民族の各「部族」の歴史を詳細に記述したブライヤントがズールー史の正史だとすれば、フゼの著作はこの大著を補足するものであった。コープは、読者はフゼの著作を読んだ上で、ブライヤントの『過ぎ去りし時』を参照すればこのカトリック司祭がどれほど多くの情報を集め、整理した上で叙述を行っているか感嘆の念を覚えるだろうと記す。植民地的な知の形成に関わってきた人々——実務的な側面(ラグ)から大学での研究(コープ)までを含む幅広い人々——は、フゼの『黒い人々』を一つの資料としてのみ捉え、白人の著作と同列には扱おうとしなかったのである。

ジョニパ・モコエナの伝記出版以前にフゼの著作が省みられなかった最大の要因はここにある¹³⁾。すなわち、ズールー人の歴史に関わる専門家が、自身が調べたいズールー人の伝統や「部族」についての記述を、より権威がある白人の著作¹⁴⁾と比較するためにフゼの記述をチェックすることを前提とする読み方が想定されていたのだ。モコエナの伝記はフゼを、その後の人類学及びズールー史研究における参照という枠組みから引き離す。その上で彼女が問うのは、次のような問いである。どのような要因が、ズールー語で書き、出版することを可能にしたのか。そしてズールー語新聞に記事を書き、本を出版するという経験はフゼにどのような影響を与えたのか。モコエナはこのように問うことで、インフォーマントとしてではなくズールー知識人としてフゼを捉え直し、フゼが知識人として振る舞い、また読者から知識人として扱われる状況を可能にした条件を探るのである。モコエナ『フゼ』への書評の一つが述べるように、本書によってフゼが現代の歴史家にとってより興味深い人物になっているとすれば¹⁵⁾、それはズールー語で書き、出版するということがそれ自体を議論の俎上に載せたことが大きいだろう。

モコエナの上記の問いへの答えをあらかじめ簡潔にまとめておこう。幼くしてキリスト教に改宗したフゼは、印刷工としての訓練を受けた。宣教師がもたらした活版印刷は、聖書や啓蒙的なパンフレットだけでなく、ズールー語新聞を刷ることも可能にした。ズールー語新聞は、読者に同じ新聞を読んでいるズールー人という共同体を想像させた。フゼはその共同体を想定して紙面を組むだけでなく、自身で新聞記事を執筆することを始めるのである。フゼは、ズールー語を解

する読者に向けてズールー人であれば関心を抱くであろうと考えられるズールー人の歴史を書き、連載をする。そして、記事の書き手であるフゼ自身、また彼の記事の読者も、ズールー人の過去が忘れ去られてしまうという危機感から、書物という媒体を用いて過去を保存することを望む。ズールー人がズールー語で書いた初の歴史書『黒い人々』は、新聞の読者という共時的な共同体から、将来の書物の読者として想定される子孫までも含めた通時的な共同体へとズールー人を広げる行為であったのだ¹⁶⁾。

モコエナが自身の研究は、著者と読者との紙上での対話を通して一冊の本が生まれ出されるに至ったのかを説明すると簡潔にまとめる時、含意されているのは以上のことである。

2. コルワ知識人とズールー語公共圏の形成：モコエナ著『マゲマ・フゼ』の概要

おそらくは南アフリカの一族であるズールー人の歴史それ自体には関心のない本稿の読者を想定して、本書『マゲマ・フゼ：コルワ知識人の形成』の重要な論点の一つであるズールー王家と改宗キリスト教徒フゼの関係についての詳細は省き、ズールー語の読み書き、そして新聞・本の出版という観点からモコエナの著作の内容をまとめておこう¹⁷⁾。本書は、植民地状況に置かれた人々にとって自身の母語で書くことが持った意義が明らかになるように構成されている。すなわち、フゼが、教えを受けた宣教師の母語である英語だけでなく、いかにして母語であるズールー語の読み書きを覚えたのか。ズールー語で書くべき内容をいかに見つけていったのか。フゼはいかにして自身が書いたズールー語の新聞記事の読者を見つけていったのか、そして本を出版したのか。さらには宣教師の強い影響のもとに識字能力を身に付けたフゼにとって、ズールー人の歴史と伝統について書くこととキリスト教の教えはどのように撚り合わされていったのか。上記の問いを中心に、フゼの生涯と彼の著作を検討することでモコエナは、フゼという一人のズールー人がいかにして「著者」に、すなわち情報提供者ではなく一人のコルワ知識人となったのかを明らかにする¹⁸⁾。

フゼは、1856年の12才ごろイギリス国教会宣教師ジョン・コレンゾに預けられる。コレンゾが学校を開くにあたって、ナタール植民地のアフリカ人統治政策の責任者であった原住民政務長官セオフィラス・

シェップストーンが彼の影響下にあるアフリカ人権力者に子弟を学校に入れるようにかけあった結果であった。コレンゾは、宣教師としては異色の人物であり、英語だけでなくズールー人がもともとの言語や文化を保つことに寛容であり、むしろ促しさえした。マゲマ・フゼと後年名乗ることになる少年は、親元ではスケレム Skelemu (面倒を起こす者) と呼ばれていた¹⁹⁾。フゼは氏族の名前であり、彼はそれを他のズールー人と同じように苗字のように使用する。マゲマという名前を選んだのもコレンゾであった。フゼは『黒い人々』の冒頭で、いかに自分の名前が決まったのかを紹介する。マゲマとなった経緯は次のようなものだ。先に改宗したウィリアム・ンギディ (William Ngidi) に、自分の改宗後の名前をどのように決めたらよいのかとフゼが尋ね、新約聖書から選ぶようにという答えを得る。そして、一度聖書から選んだ名前 (Petros と Johane) をコレンゾに持っていったが、否定され、その後コレンゾがズールー人的な名前のリストから選ぶように渡される。そのリストの中にマゲマが含まれていたのだ (30-31)。自身宣教師でありながらも、ズールー人の文化に惹かれ、むしろ先住民であるアフリカ人に対する不正を伴う植民地政策と入植者経済の発展に批判的だったコレンゾらしい展開である²⁰⁾。親元から離れキリスト教に改宗しつつもズールー人としての意識を持った「マゲマ・フゼ」は、この改名によって生まれたのである。

ズールー語で書き、出版するというフゼの経験もコレンゾとの関わりの中で育まれてきた。フゼが書いたもので記録に残っている最も古いのは、1857年と59年にコレンゾがケープ植民地総督のジョージ・グレイに送った手紙に添付されていたスケッチと作文であり、西ケープ州アーカイブのグレイ文書の中にある。まだ少年でスケレムを名乗っていたフゼのコレンゾの宣教師学校での日常生活を説明した文章と、彼が古城のような建物を描いたスケッチが、宣教活動の成果の見本として送られたのである (68-72)。

フゼが書いたもので最初に刊行されたのは、コレンゾがズールー王ムパンデを訪問した時の日誌である。フゼを含め3人のズールー人キリスト教徒がコレンゾに随行し、それぞれ日誌を残している。彼らがズールー語で書いた日誌は、前半がズールー語原文・後半が英訳という形で1冊の本にまとめられ、1860年に出版された。コレンゾは序文で読者がズールー語原文と英訳を対象することで、ズールー語読解能力を向上させることを期待すると述べており、この本の読者とし

て新任の宣教師，あるいはヨーロッパ人入植者が想定されていることが分かる²¹⁾。

コレンゾに促されてフゼが書いた作文や日誌は，宣教活動の成果を証明するために活用されることを期待されたものであった。もしフゼが書いたものがこれだけであれば，フゼは宣教師コレンゾのインフォーマントとしてのみ認識されていただろう。しかし，フゼは，ジョン・コレンゾが1883年に亡くなった後もズルー語で書き続ける。特に19世紀末からズルー語新聞への投稿を重ねることで，独自の書き手となっていった。各国の宣教団体は，新聞を発行し，また宣教師が運営する学校で教育を受けたアフリカ人が独自に新聞を発刊することもあり，ズルー語を含めたアフリカ言語の新聞刊行は19世紀半ばから活況を呈していた（ただし，資金・人材不足で数年で廃刊になるものがほとんどであったが）。フゼが書いた記事は，*Inkanyiso*（「光/啓蒙」）及び *Ipepa lohlanga*（「民族の新聞」）というズルー語新聞の編集者への手紙という形をとり，亡命したズルー王家の動向や，ナタール植民地におけるアフリカ人の権利獲得を目指す運動について伝えている。

フゼはこれらの知見をどのように獲得していったのだろうか。フゼは1879年のズルー戦争後セントヘレナ島に勾留されることとなった王子デヌズルーの家庭教師になる。背景にはまたしてもコレンゾがいる。1853年にナタール植民地の主教となり宣教を開始した当初コレンゾとアフリカ人統治行政のトップであったシェップストーンは，シェップストーンが配下のアフリカ人首長に子弟をコレンゾの学校に入学させるように説得するように依頼するなど協力関係にあった。しかし，シェップストーンが自身の意向に沿わない首長を廃位し，島流しにするなど強権的な政策を推し進める中で両者の対立は高まり，ズルー戦争時には，コレンゾ及び彼の娘たちはズルー王家の支援に回っていた。ズルー戦争後のズルー人同士の内戦を経て，ズルー王と王子たちは，最初はナタール植民地のエショウエに，次にセントヘレナ島に抑留されることとなった²²⁾。フゼはジョン・コレンゾの娘の一人ハリエット・コレンゾの手配によって王と王子の家庭教師となったのである。フゼは後年セントヘレナ時代の経験とズルー王家の動向を，ズルー語新聞イランガ紙の記事としてまとめている。

また，1896年から1年間セントヘレナ島に派遣された経験はズルー人を超えたアフリカ人の一体性へとフゼの関心を向けることにつながった。同地でフゼは，

アフリカ大陸の他地域出身者だけでなく，解放奴隷とも出会うことになった。奴隷貿易に果たしたイギリスの役割を考えれば欺瞞的とも考えられるが，イギリスによる奴隷貿易の禁止，奴隷船の拿捕，解放という一連のプロセスをフゼは，ビクトリア女王の功績として称揚する。またセントヘレナ島滞在時から，フゼはイギリス人言語学者アリス・ヴァーナーと文通をはじめ，現在バンツール人の南下という歴史的事象を知ることになる。フゼの『黒い人々：彼らはどこから来たのか』は，聖書の記述とバンツール人の南下を結びつける試みでもあったのだ（140-142）。

ナタール植民地におけるアフリカ人統治政策への直接的な批判も，イランガ紙編集者への手紙という形で同新聞に掲載されている。フゼの批判の一つは，「原住民法（*native law*）」からの除外規定の欺瞞性を対象としていた。ナタール植民地の間接統治政策は，法的な二重形態をとっていた。すなわち白人入植者が成文法によって支配されるのに対して，アフリカ人は，伝統的にアフリカ人が統治されてきた（と植民地政府が認めた）「原住民法」の下に置かれたのである。ただし，この法的な二重体制には，例外が存在した。1865年に交付された除外法（*Exemption Law*）において，キリスト教に改宗し，「文明化」された生活を送っていることが証明できれば，申請を行い，許可されれば「原住民法」を外れ，白人入植者と同じ法に入ることができることとされたのである。

しかし，「原住民法」から外れたとしても，白人入植者と同様の権利が得られる訳ではなかった。小屋税や結婚税，銃の保持の禁止など，アフリカ人であることによる課税からは除外されたアフリカ人も逃れることはできなかったのである。フゼは1875年に他の改宗者と連名で政府に要望書に出し，この不公正な状況を正すよう植民地政府に「イギリス臣民」として権利請願活動を行なった。1915年に同請願の共同署名者ジョン・クマロ（*John Khumalo*）の追悼記事がイランガ紙に掲載された際には，フゼはすぐに反論記事を発表し，クマロは政府が反対の姿勢を示すとすぐに弱腰になったが，自身は撤回しなかったと述べ，植民地政府に対する急進的な人物として自身を描いている（118-120）。

政策への批判やズルー王家の動向など同時代的な記事の執筆を中心としていたフゼが，自身の回顧録及びズルー人の歴史を中心とした連載を始めたのは，1915年のイランガ紙においてである。そのタイトルは，「*Saphumaphi Tina*（私たちはどこから来たのか）」で

あった。新聞記事の内容に関連して編集者に見解・反論を書き送っていたフゼが、今度は記事を書く側に回ったのである。

フゼの連載に対しては、新聞読者から好意的な反応が投書という形で表明された。イランガ紙は、フゼと彼の記事の読者たちがズールー人及びアフリカ全体の歴史を議論する場となったのである。モコエナが特に注目するのは、読者からの投書の中に、フゼに連載を書物としてまとめ出版するように促すものがあることである。投書は、フゼの連載が本となり学校で使われるようになれば、自分たちの子孫がズールー人の歴史を忘れずに記憶に留めることができるようになることと述べる(46-49)。この投書が契機となったかは不明であるが、フゼはイランガ紙上で、本を出版するための資金を支援するように読者に呼びかけを行なっている²⁵⁾。フゼのズールー史に関する連載記事は、彼と同様に識字能力を持ち、ズールー語を解する読者という共時的な共同体を前提として書かれた。そして、ズールー人の歴史と伝統を守るべきだという読者たちの声に促されるように、自民族の歴史を学ぶべき将来生まれてくる子どもたちを含む通時的な共同体としてのズールー民族を想定して出版まで漕ぎ着けたのである。

3. ズールー語で歴史を書くこと：その変容

このようにモコエナはマゲマ・フゼの唯一の著作『黒い人々』が出版されるまでのプロセスを詳述することで、フゼがいかに読者を見つけ、著者となっていったのかを明らかにした。フゼの生きた時代におけるズールー語歴史叙述の可能性に人々の目を向けさせる優れた著作である。しかし、フゼという個人から離れて考えるならば、ズールー語での歴史書出版を可能とする前提、及びズールー語歴史叙述への制約についてもさらなる指摘を加えることも可能であろう。

例えば、モコエナが指摘した新聞から書籍へという流れのさらに前提として手紙を考えることができる。新聞への投書の前には、特定の人々に宛てた手紙の存在があったのではないか。フゼが編集者への手紙という形で新聞への投稿をはじめ、その後自身で記事を書くようになっていったという経歴にも注意が払われるべきであろう。アフリカ人のエリート校を目指したコレンゾの学校エクカンエニを対象とした博士論文において、ヴィキル・クマロは宣教師によってもたらされた識字能力を活用する場を頻繁な手紙のやりとりに見出したと述べる²⁶⁾。さらにクマロは手紙が個人間のや

りとりにとどまらず、複数人の前で読み上げられることによって地理的には離れたズールー人改宗者の議論の場を形成したと敷衍する²⁵⁾。クマロの議論を踏まえれば、新聞紙上での活発なやり取りは、既に存在した手紙のネットワークに基づきつつ、印刷技術によってその議論の場を不特定多数の読者にまで拡大したものだといえることができるだろう。

モコエナの著作は、インフォーマントとして見られがちであったフゼを一人の知識人として描くことを主眼としており、その試みは成功している。しかし、いかにしてフゼを含めたアフリカ知識人が南アフリカの歴史研究において脇に追いやられていったのか、英訳の編者及び訳者の序文に言及するだけでなく、ズールー語教科書の出版という観点からも考えることができたのではないか。フゼが自身の本の出版時に意図に反して、学校教育のための教科書として『黒い人々』が使われることはほとんどなかった。1934年の一年のみズールー語文学及び歴史という科目の指定教科書として使われていることが分かっており、これは植民地政府に批判的な内容を含む自費出版の著作としては恵まれていたと考えることもできる²⁶⁾。しかし、指定されたのは少数の学生が受講する教員資格取得準備のクラスであり、学生数の多い低学年向けの歴史教材としては白人行政官ジェームズ・スチュワートが執筆したズールー語の歴史教科書が用いられていた。フゼの独自の見解を多く盛り込んだ『黒い人々』は、ズールー人学生が歴史を学ぶ際の教科書としては相応しくないとナタール州原住民教育省は判断したのである。フゼの著作が等閑視される要因として、フゼの死後、ズールー語教科書に対するナタール州政府の働きかけが強化されたことを指摘することができる²⁷⁾。

モコエナは、『マゲマ・フゼ』をカトリック宣教師A.T.ブライアントが1929年に発表したズールー史の大著『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時』でフゼを重要な情報提供者として紹介していることに触れて、その著述を終えている(278)。ヨーロッパ系の言語で書かれた書籍や史料を参看するだけでなく、自身のズールー語能力を活かして多くのズールー人から聞き取りを行い、また(刊行点数がそもそも少ないため)少数ではあるがズールー語の著作も読み込んだ上で、それらを総合したブライアントの著作は、19世紀のズールー史を対象とした基本書として20世紀末まで参照された²⁸⁾。フゼの著作が大いに参考になったとするブライアントの賛辞を、モコエナは逆説的(paradoxical)であると注記しつつ引用する。それ

はズルー語学者 A.T. コープが1979年に出版された『黒い人々』英訳の序論で述べる²⁹⁾ように、フゼのようなズルー人個人の歴史叙述が、ブライアントの大作に比べて信頼に足りないものとされたからである。

20世紀前半に大学やアーカイブなど、白人入植者を中心に置く歴史学が制度的に整えられていくのと並行して、アフリカ知識人が生み出す知は傍流に追いやられていった。徐々に過酷さを増す人種隔離の現実を生きる南アフリカのアフリカ人知識人にとって、歴史書を書くことは魅力的な行為とはもはや捉えられなくなったとも考えられる。実際に、ズルー語ではマゲマ・フゼ、コーサ語ではジョン・ヘンダーソン・ソガ³⁰⁾、そしてツワナ語では（主著は英語ではあるが）モデリ・モレマ³¹⁾など19世紀後半に生まれ育った歴史家たちが著作を発表していったのに対して、その後の世代の知識人たちは歴史小説³²⁾や叙事詩³³⁾など文学作品を執筆することでアフリカ人の歴史と生活を矮小化する人種隔離・アパルトヘイトに対抗する歴史観を提示していった。

フゼという個人に囚われずにより長い射程で見れば、上記のような指摘を本書に対して行うことができるだろう。しかし、ズルー語で書くこと、特に歴史を書くことの研究上の意義は、本書『マゲマ・フゼ』によって認識されてきたという側面がある。筆者も含めて、モコエナの著作にあるいは著者自身に接することでアフリカ言語の史料を用いた研究を行うことをはじめた研究者も出てきている³⁴⁾。その点で、本書はズルー語の歴史叙述のはじまりを扱う本であると同時に、この主題を研究領域として認知させたはじまりの本でもある。

出版は一人の人物をコルワの知識人とした。モコエナはフゼの伝記の目的を、彼の生涯を辿ることで、あり得たかもしれないアフリカ知識人像を提示することであると述べる。すなわち、白人の人類学者や歴史家に情報を提供するインフォーマントではなく、同じズルー人をオーディエンスとして持つ知識人となることである。ただし、人種隔離政策が強化され、「有色」とされた人々の権利への制限が強まる20世紀の南アフリカにおいては、その可能性は狭められていくのではあるが。

ズルー人知識人フゼを題材としたアフリカ言語における歴史叙述の可能性を探るモコエナの著作は、人はいかにして本の「著者」となるのかという単純な問いをズルー語という媒体に着目しつつ考えることで、英語のみでは捉えられなかったフゼの生きた社会を奥

行き深く照らし出すことに成功している。この論評がその射程の一端でも伝えることができれば幸いである。

注

- 1) 以下、本文で Hlonipha Mokoena, *Magama Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2011) について述べる際は、該当箇所のページ数を括弧内で示す。それ以外の文献については、文末注に文献情報と該当ページを記載する。
- 2) ズルー人以外であれば、フゼが教えを受けたイギリス人宣教師ジョン・コレンゾがズルー語で執筆した『黒人及びナタールに関する歴史 *Izindatyana Zabantu Kanye Nezindaba Zas'eNatal*』(Emagundhlovu [Pietermaritzburg]: May and Davis, 1859) を挙げるができる。
- 3) 同書を日本で「見つけた」のは南アフリカ留学から帰国して翌年2020年であり、筆者はジュニア・フェローとして AA 研に所属していた。
- 4) Sihle Zikalala, "Remembering Magema Fuze on the Centenary Anniversary of the Publication of Abantu Abamnyama Lapa Bavela Ngakona," Newspaper, Independent Online, February 23, 2022, <https://www.iol.co.za/dailynews/opinion/remembering-magama-fuze-on-the-centenary-anniversary-of-the-publication-of-abantu-abamnyama-lapa-bavela-ngakona-162ddf4a-7910-40d3-b671-ce42c7d2edcb>. 最終アクセス日2022年9月19日。
- 5) 拙著『ズルー語が開く世界：南アフリカのことばと社会』(風響社, 2022年) は、ズルー語の解説書ではなく、南アフリカの最大都市ヨハネスブルクでズルー語を学んだ経験を記した小著である。そのため、日本でズルー語を学ぼうとすれば、たとえば Arnett Wilkes and Nicholas Nkosi, *Complete Zulu: Teach Yourself*, 1st ed. (London: Hodder Education Group, 2010) など英語の参考書に頼らざるを得ない。
- 6) ただし、今後、日本でアフリカ史研究が広がりを見せることがあれば、状況は変わってくるかもしれない。戦後三度目となる世界史講座の刊行にして初めて、岩波講座世界史にアフリカ史を対象とする巻が含まれることとなった。同巻の序論で、永原陽子は、川田順造の古典的名著『無文字社会の歴史』が図らずも広めた無文字社会というアフリカ・イメージに疑義を呈しつつ、アフリカ諸言語やアラビア語を含めた文字史料活用の可能性を指摘する(永原陽子「世界史の中のアフリカ史」永原編『岩波講座世界史18：アフリカ諸地域：～二〇世紀』[岩波書店, 2022年], 8-10頁)。
- 7) モノとしての本の重要性も含めて南アフリカにおける書物史の動向をまとめた論文として、上林朋広「読書行為の規定と越境:南アフリカにおける書物・出版文化史研究動向の紹介」『書物・出版と社会変容』24 (2020): 176-190頁を参照。
- 8) Isabel Hofmeyr, "Metaphorical Books," *Current Writ-*

- ing: *Text and Reception in Southern Africa* 13, no. 2 (January 1, 2001): 100-101.
- 9) キリー・キャンベルは南アフリカ及びそのひとつの州であるナタールに関する歴史的史資料の著名な蒐集家であった。彼女の活動に関しては、以下の論文を参照。上林朋広「キリー・キャンベルの収集活動から見る歴史意識の変容」渡辺尚志編『アーカイブズの現在・未来・可能性を考える：歴史研究と歴史教育の現場から』法政大学出版局，2016年，273-319頁
- 10) A.T. Cope, "Editor's Preface," in Magma M. Fuze, *The Black People and Whence They Came*, trans. Harry C. Lugg (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979), ix-x.
- 11) A.T. Cope, "Editor's Preface" ix-x; A.T. Bryant, *Olden Times in Zululand and Natal* (London: Longmans, Green and Co., 1929).
- 12) Norman Etherington, "A.T. Bryant's Map of the 'Native Clans in Pre-Shakan Times,'" in *Tribing and Untribing the Archive*, ed. Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer, vol. 1 (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016), 238-61.
- 13) ショニパ・モコエナ自身も、博士論文の対象としてマゲマ・フゼを取り上げること、フゼをインフォーマントとしてのみ見る審査委員に対して正当化しなければいけなかったと述べる。Hlonipha Mokoena in discussion with the author, 27th Sep. 2022.
- 14) 代表的な著作としては、先述の Bryant, *Olden Times* に加えて、白人行政官であるギブソンが執筆した J. Y. Gibson, *The Story of the Zulus* (London: Longmans, Green and Co., 1911) を挙げることができる。
- 15) Norman Etherington, "Magma Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual, Hlonipha Mokoena: Book Review," *Historia* 57, no. 2 (November 1, 2012): 482-86.
- 16) ただし、現在クワズールー＝ナタール州とされる地域において、ズールー語を話すという事実によって自身をズールー人であると意識する人々の共同体が19世紀前半の宣教師及び白人入植者の到来以前に存在したわけではない。ズールー人という民族意識も、植民地化の過程で形成されてきたのである。その過程は複雑であるが、差し当たり以下の2冊を参照。フゼを含めた識字能力を持つキリスト教改宗者を中心に、自分たちはズールーを話すがゆえにズールー人であるとする意識の生成については、ヨーロッパ及びアメリカ出身の宣教師たちと彼らに協力したアフリカ人たちによって同ジングニ語系統のコサ語とズールー語が異なる二つの言語として分離される過程を辿った、Jochen S. Arndt, *Divided by the Word: Colonial Encounters and the Remaking of Zulu and Xhosa Identities* (Johannesburg: Wits University Press, 2022) を参照。一方、識字能力を持たない人々の間でのズールー人であるという意識の広がりについては、1880年代以降の金鉱山開発の急速な発展の中で、ヨハネスブルク周辺部にズールー語話者の居住地から出稼ぎに出た移民たちが鉱山労働の現場で全く通じない言語を話すアフリカ系の人々と出会ったことが民族意識の形成において重要だったと指摘する Michael R. Mahoney, *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC: Duke University Press, 2012) を参照。
- 17) ズールー王家とナタール植民地の関係を対象とする日本語の研究論文は、見つからないが、峯陽一、『南アフリカ：「虹の国」への歩み』(岩波書店，1996年)，76-80頁にズールー王国の勃興と白人入植者との関係に関する簡潔な記述がある。また、拙論「ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策：創られた「伝統」の変容・浸透・放棄の過程」(一橋大学社会学研究科博士論文，2020年)，第1章は、1920年代・30年代の南アフリカにおけるアフリカ人統治行政をめぐる文脈において、19世紀のナタール植民地の間接統治の歴史がいかに議論されていたかを検討している。
- 18) ズールー語の名詞コルワ(単 ikholwa, 複 amakholwa) は動詞「信じること (ukukholwa)」から派生した。直訳では「信じる人」を意味するが、19世紀の初期アフリカ人キリスト教改宗者を指す単語である。
- 19) モコエナは、この語がアフリカンス語のアライグマ (skelm) のズールー語化された語彙であると主張している (75)。
- 20) コレンゾは神学者・宣教師、さらには数学者という多才な人物であった。南アフリカにおいては、アフリカ人の権利保護を主張し、ナタール植民地政府を批判したことで悪名高い宣教師として知られる。一方でイギリス本国においては、旧約聖書の記述は歴史的事実ではないとする主張で論争を巻き起こした。コレンゾは聖書のズールー語訳をソギディと進めた際に、ソギディから旧約聖書の創世記の記述は本当に起きたことなのかという疑問を提示され、自身で確かめるために数学者としての能力を生かし、独自の年代測定を行った。Jeff Guy, "Class, Imperialism and Literary Criticism: William Ngidi, John Colenso and Matthew Arnold," *Journal of Southern African Studies* 23, no. 2 (June 1997): 219-41, <https://doi.org/10.1080/03057079708708534>.
- 21) その後ズールー戦争の前年1878年に、イギリスの雑誌マクミラン・マガジンにフゼの日誌の抄訳が掲載された。
- 22) セントヘレナ島に抑留されたズールー王ディヌズールー・カ・チェツワヨの経験については、ウィリアム・アトキンズ『帝国の追放者たち：三つの流刑地をゆく』(柏書房，2023年)で紹介されている。
- 23) ただし、実際には資金が集まらず、フゼは『黒い人々』の序文で、資金が集まればもっと早く出版できたと苦言を呈している。Magma M. Fuze, *The Black People and Whence They Came*, trans. Harry C. Lugg (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979), v.
- 24) Cyrius Vukile Khumalo, "Epistolary networks and the politics of cultural production in KwaZulu-Natal, 1860 to 1910" (Ph.D., Ann Arbor, United States, 2005), <http://search.proquest.com/docview/305452416/abstract/54B4FFC7A86D4812PQ/37>.

- 25) Khumalo, 175-179.
- 26) "Department Notice" *Native Teachers Journal* 13(1) (Oct. 1933): p.37
- 27) ナタール州教育省によるズールー語教科書出版への介入に関しては以下を参照。上林朋広「ズールー・ナショナリズムにおける「曖昧さ」の縮減：1930・40年代のズールー語教科書出版における白人行政官と保守的ズールー知識人の協調」『一橋社会科学』13(2021): 117-44。
- 28) A.T. Bryant, *Olden Times in Zululand and Natal* (London: Longmans, Green and Co., 1929).
- 29) A. T. Cope, "Editor's Preface," *Black People and Whence They Came*, ix.
- 30) John Henderson Soga, *The South-Eastern Bantu: Abe-Nguni, Aba-Mbo, Ama-Lala* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013). 原著は、コーサ語の原稿をもとに著者自身が英訳した上で1928年にヴィッツ大学出版局より出版された。
- 31) S. M. Molema, *The Bantu-Past and Present.*, reprint (Cape Town: Struik, 1963); Jane Starfield, "Dr S. Modiri Molema (1891-1965): The Making of an Historian" (Ph.D. Thesis, University of the Witwatersrand, 2008), <http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/5872>.
- 32) 例えば、ズールー王家に関する歴史小説を執筆した R.R.R. Dhlomo, 特にズールー王国の創始者であるシャカの生涯を対象とした R.R.R. Dhlomo, *UShaka* (Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1937) を参照。
- 33) 日本語にも訳されたズールー語詩人マジシ・クネーネを例として挙げることができる。マジシ・クネーネ (土屋哲訳)『偉大なる帝王シャカ』(岩波書店, 1979年)。
- 34) 本稿ではズールー語での歴史叙述に絞ったが、アメリカ・ヨーロッパの学会を中心になされるアフリカ史や、アフリカ諸国独立後のナショナルヒストリーと対比させる形で、アフリカ言語による歴史叙述がもたらすローカル視点を重視した研究として、次の文献を挙げることができる。Derek R. Peterson and Giacomo Macola, eds., *Recasting the Past: History Writing and Political Work in Modern Africa* (Athens: Ohio University Press, 2009).